



## 開会挨拶

### ◆ VR は理解と発見のメディア

原島博

会長、東京大学



“開会挨拶の私”

皆さん、おはようございます。日本 VR 学会を代表しまして、まずは杜院長、林副院長をはじめとする国立故宮博物院の皆様方にこのような素晴らしい会場を提供いただきまして感謝しております。

日本バーチャルリアリティ学会は、1996年に発足いたしました。バーチャルリアリティ学会ではエンジニアリングだけではなくてアートを大切にしております。エンジニアリングとアートを融合する、いわば場として今日これから開きます VR 文化フォーラムがでございます。この VR 文化フォーラム、今回が第六回となりますけれども、毎回最初に会長が言わなければならない言葉がございます。それは、ここにありますように「バーチャル」というのが、日本語でいいますと「仮想化」ということとなりますが、「虚」か或いは「嘘」かということなのです。このときに必ず会長は、「バーチャル」は「嘘」ではないということを言わなければいけないということとなっております。

私が持っておりますある辞書を見ますと、「バーチャル」の反対語として「ノミナル (nominal)」という

言葉が出てまいります。「ノミナル」は名目的とか形式的とかいうそういう意味であります。で、この「ノミナル」の反対語を見ますと「リアル」という言葉が出てきます。「バーチャル」の反対語が「ノミナル」、「ノミナル」の反対語が「リアル」であるということは、「バーチャル＝リアル」であるということになります。

こういうことをいつも話しているわけですが、今回この台湾にきてバーチャルリアリティという言葉が、こういうふうに「虛擬実境」という言葉であることに気づきました。これは一体どういう意味なのか、私中国語にあまり詳しくはありませんけれども、二通りの意味にとれるのではないかという風に思っております。一つは、本当の實境を擬している、真似しているようであるが実際は偽であり、虚ろであるという意味であります。もうひとつの意味は、一見虚であるけれども、それはまさに実質的に實境をあらわしていると、そういう意味であります。私はこの二番目の意味だという風に解釈しておりますが、と同時に私はもう一つバーチャルに対して意味をもたせております。それは、「實境を擬した虚」を体験することによって実際の事をより理解できるということでもあります。

実は今日私、台湾の服装をして参りました。頭で台湾のことをいろいろ理解する、それはやっぱり限界があります。私は日本人ですけど、こういう台湾の服装をすることによって、台湾の人の気持ちが少しでも理解できる気がします。この、その国の着物を着るということは実は二年前のバリで VR 文化フォーラムがありまして、そのときは私もバリの服装をいたしました。バリではあるセッションを、バリの文化を語るというセッションを受け持ちましたが、そのときに私と、二人ここにいらっしゃいますが、河合徳枝さんと、それからマリ・クリスティーンさんとセッションを持ちました。私そのときの経験、ほかの人のことをきちんと理解するためには、やはりその人の服装をすることが重要だということが分かりました。



“バリ島での私”

今年の3月、日本の顔を研究する学会で、ある試みをいたしました。そのときの格好がこの女装写真です。ま、私は初めての経験でした。ふだんからこういう格好をしているとは誤解しないでください。やはり女性の気持ちを理解するためには、同じ格好を一回はしなければならぬ。まじめな学会のことで、日本の一番大きな新聞である朝日新聞に大きく取り上げられました。



“右の写真も私”

普段私は普通の真面目な顔で生活をしております。こういう顔でなければいけないと思っていることも時々あります。でも、やはりこの顔だけにこだわってはいけません。他人を理解することはできません。暴走族のスタイルをしたこともあります。右上のようなニヒルな顔もあります。有名なフォトグラファーに撮ってもらいました。5年位前に歌舞伎のメイクをしました。自分自身、歌舞伎役者になったような気分になりました。これも私のニュード写真 MRI による脳断面であります。考えてみたら、このような顔をすることによって本当の私の顔が一体どれであるか分からなくなりました。

顔を変えるということはいろいろな意味があります。

まず、相手を理解するために顔を変える、これ重要なことでもあります。本当の女性を理解するためにはそういう服装をする必要があります。ハイヒールを履いたときに普段女性はこんなに苦労しているんだということがよく分かりました。また、例えば街へ行って車椅子の人が一体どういう気持ちでいるのかということは、自分自身がやはり車椅子に乗って歩かないと分からないと思います。

またもう一つの顔を変えるという役割で、別の自分を発見するということがあります。普段自分の顔の一つだと思って我々生活しております。でもそれはもしかしたらその職業、環境によって作られた顔なのかもしれません。その顔にとらわれながら生きていくと世界も狭くなってしまいます。むしろ別の顔をすることによってもう一人の自分を発見することも可能になってまいります。



“いろいろな私”

考えてみたらバーチャルリアリティの役割もそういうことなのかもしれません。バーチャルとはにせものになることではありません。バーチャルを経験することによって、本当にその相手、あるいは物事を理解することができるようになります。バーチャルを経験することによって、その事に関して新たな発見も可能になります。その意味でバーチャルリアリティ、仮想環境は理解と発見のメディアであると私はそう思っております。

日本語に百聞は一見に如かずという諺がありますが、百見は一体験に如かず、体験なしに理解と発見は無いというのが私の考えであります。このVR文化フォーラム、ぜひ台湾と日本の相互理解の場になり、同時に、協力することにより新たな発見が生まれる、そういう場になってほしいという風に思っております。ということで私の開会の挨拶とさせていただきます。